

平成二十六年

第二十四回島根県雲南市

「永井隆平和賞」入賞作品集

島根県雲南市教育委員会

もくじ

小学生低学年の部

最優秀賞 名前のプレゼント

優秀賞 だいすき

佳作 ぼくのへいわ

〃 へいわを

島根県・雲南市立飯石小学校

島根県・雲南市立飯石小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立飯石小学校

藤原秀伍

松谷遥月

木次緑人

渡部哲也

小学生高学年の部

最優秀賞 やさしさと笑顔の力

優秀賞 ひいおばあちゃんをうけついで

佳作 平和を作るには

〃 言葉の兵器

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立掛合小学校

島根県・雲南市立吉田小学校

島根県・雲南市立西小学校

田中太士

石飛花菜

吉田千之輔

上代雄暉



中学生の部

最優秀賞 平和のとりで

優秀賞 残された蝶

佳作 改めて気付いたこと

〃 如己愛人で世界を変える

広島県・盈進中学校

島根県・大田市立第三中学校

島根県・雲南市立吉田中学校

長崎県・長崎市立野母崎中学校

池田風雅

武田神楽

堀江菜々

福田芽衣

福田芽衣

高校生の部

最優秀賞 曾祖母の涙

優秀賞 語り部

佳作 平和はすばらしい

〃 歴史に色をつけよう

〃 被爆地から伝えたいこと

沖縄県・未来高等学校

東京都・日本大学櫻丘高等学校

愛知県・滝学園滝高校

愛知県・南山学園南山高校

長崎県・長崎県立長崎東高等学校

高嶺真帆

寺迫晃良

伊藤正子

伊藤藤可子

向井晴香

一般の部

最優秀賞 語り継ぎたい戦争の悲劇 平和への願いをこめて

優秀賞 戦争のつめあと

佳作 大事なことは忘れないということ

広島県

島根県

山口県

三年永熙一

三宅玲子

山下理恵



◆小学生低学年の部◆

最優秀賞

名前のプレゼント

島根県雲南市立

飯石小学校 三年

藤原秀伍  
ふじ はら しゅうご

ぼくの名前は、「秀伍」といいます。とにかく元気で明るくたくましく、やさしい子に育ってほしい、人に好かれて周りの人の役に立つゆう秀な人になってほしいと考えてつけられたそうです。この話をお母さんから聞いたとき、ぼくは、世界一うれしい気持ちになりました。ぼくのことを大切に思ってくれていて、名前が宝物みたいに感じました。

友だちも、家の人に名前の意味を聞いてきて教えてくれました。みんなの名前も、「元気に大きくなってほしい」とか「幸せになるように」という意味がこめられています。名前を決めるのに、たくさんの時間をかけて考え

ておられたこともわかりました。ぼくは、これまで名前に意味があるなんて思っていなかったから、名前にはみんな意味があつてつけられていると知って、びっくりしました。そして、名前は、家ぞくの人が一生けん命考えてつけられたもので、ぼくもみんなも、とても大切にされているんだと思いました。

大切に思つてつけられた名前だから、ぼくの名前もみんなの名前も大切にしたいと思います。

「名前を大切にすることだろ。」みんなと考えたとき、ぼくは一番に、変なよび方でよぶのはぜつたいいけないなと思いました。大切に思つてつけられた名前を変なふうによぶのは、その人もその人の家ぞくもみんなをきずつけることだと思うからです。でも、それだけじゃない。「大切にすること」ということは、「らんぼうにしない」ということじゃなくて、「やさしく守るようになる」ということだと思うから、名前をやさしく守るようにしようと思いました。それは、遊ぶときも、べん強のときも、いつも名前をやさしくよぶということ。名前をやさしくよんだら、やさしい気持ちで話ができると思うし、よばれた方もうれしくなつて、どんどんやさ

しい気持ちがふくらむと思います。けんかのときだって、おこっている気持ちが消えて、なか直りできるかもしれないと思います。

そう思つて、友だちの名前をやさしくよんでみました。そうしたら、笑顔でふりむいてくれました。ぼくもうれしくて、もつとなかよしになれるような気がしました。名前をやさしくよぶことは、どんどんやさしくなれるうれしいプレゼントだなと思いました。

平和のべん強をしたとき、なんで大人なのに人をきずつけるせんそうをするんだらうと思いました。ぼくは、世界中の人たちに教えてあげたいです。「あの国だから」「考え方がちがうから」といつてこうげきするんじゃないやなくて、みんな一人一人名前があるんだよということ。そう思つたら、その人のこと、その人の家ぞくのことか思いうかぶと思います。相手の名前を聞いて、やさしくよぶだけで、なかよくなれるかもしれないよと教えてあげたいです。ぼくは、これから、みんながもっている「名前」をやさしくよぶプレゼントで、世界中の人たちとなかよくなるうと思います。



◆小学生低学年の部◆

優 秀 賞

だいすき

島根県雲南市立  
飯石小学校 一年

松<sup>まつ</sup>  
谷<sup>たに</sup>  
遥<sup>は</sup>  
月<sup>つき</sup>

わたしの「おかあさん」をしようかいます。りょうりじょうずなおかあさん。おかあさんがつくった「かぼちゃケーキ」がおすすめです。びじんなおかあさん。おけしようにするところをみるのがすきです。あめとーくをみておかわらいます。おかあさん。わらっているおかあさんのかおがすきです。わたしがわるいことをしたとき、おおきなこえで「こら。」というおかあさん。こわいけど、さいごにはぎゅうをしてくれるおかあさん。そんなおかあさんがだいすきです。

だいすきなおかあさんとすこしのあいだ、はなればなれのひがありました。おかあさんは、あかちゃんをうむ

ためににゅういんしました。わたしは、おねえちゃんになるためのじゅんぴをするひだとおもいました。わすれものをしないように、ひとりでがっこうのよいをししました。よごれたふくをじぶんでせんたくきにいれました。おとうさんとおにいちゃんのいうことをよくききました。おとうさんといっしょに、へやのそうじをがんばりました。おねえちゃんになるためにがんばっていたけど、おかあさんをおもいだしてなみだがでたこともありました。おにいちゃんと「おかあさんにあいたくなかったね。」とはなしている、おとうさんがおかあさんにでんわをしてくれました。「おかあさんもみんなにはやくあいたくなかったよ。」といってくれてげんきになりました。

わたしとおなじとしのおんなのこが、せんそうでおかあさんをなくしたことをしりました。このさきずっと、おかあさんのかおをみたり、こえをきいたりできないのです。すこしのあいだでも、おかあさんとあえないとなみだがでたのに、ずっとあえないおんなのこはもったかなしいとおもいます。せんそうはこわいです。

だいすきなおかあさんが、あさひくんといっしょにいえにかえってくるひ、わたしはどきどきしながらいえへ

かえりました。ふたりのかおをみたとき、うれしかったです。

わたしのあたらしいおとうと、あさひくんをしようか  
いします。ちいさくて、いいにおいがします。だっこす  
るとあたたかくて、ふわふわします。はなをさわると、  
につこりします。おなかがふくらんだり、へっこんだり  
します。すーすーといきがきこえてきます。てにゆびを  
ちかづけると、ぎゅっくにぎってくれます。ないても、  
へんなかおをするとうらつてくれます。六がつ十八にち  
うまれのあさひくんとは、まだ一かげつしかいっしょに  
いないけど、あさひくんのきもちがよくわかるようにな  
りました。わらったりないたり、みるくをのんだり、う  
ごいたり、おおいそがしのあさひくんだけど、いつまで  
もちかくにいてほしいなとおもいました。

わたしは七がつ十八にちうまれです。いちばんのぶれ  
ぜんとをもらったきがします。このまま、しあわせなき  
もちがずっとつづくといいな。



◆小学生低学年の部◆

佳 作

ぼくのへいわ

島根県雲南市立

三刀屋小学校 二年

木 次 禄 人  
こ つぎ ろく と

ぼくは、「かわいいそうなぞう」という本を読みました。せんそうのせいでえさをもらえずにしんでしまった上のどうぶつえんのぞうのお話でした。ぼくは、えさがもらえなくてしんでしまったぞうがほんとうにかわいそうだとおもいました。えさをあげたくてもあげることができなかつたしいくいんさんもかわいそうだとおもいました。せんそうはいやだとおもいました。

ぼくは、せんそうは、みんながいやな気もちになったり、かなしい気もちになったりするものだとおもいます。ぼくは、ずっとへいわでいてほしいなとおもいます。せんぜんちがうかもしれないけれど、ぼくは、へいわつ

てみんながいっしょにいられることなんじゃないかなとおもいます。おじいちゃんがせんそうについて、話してくれたことがあります。おじいちゃんは、

「せんそうは、家ぞくや友だちがしんでしまったり、いっしょにいることができなくなって、ばらばらになったりしてしまっただよ。」

と教えてくれました。ぼくはそんな風になったらかなしいし、ぜったいにいやだとおもいました。

友だちとおにごっこをしてあそんでいる時。友だちといっしょに教しつで学しゅうしている時。家ぞくのみんなでサッカーをしている時。ぼくは、おじいちゃんの話をおもい出して、

「みんなでいるとたのしいなあ。へいわだなあ。」

とおもうことがあります。へいわって、みんなでうれしい気もちになったり、たのしい気もちになったりするものだとおもいます。

ぼくは、へいわでいるためにはどうしたらいいのかなとかんがえてみました。そうしたら、たいいくの時かんのことをおもい出しました。グループにわかれてマットをしました。マットのかたづけをみんなでしました。マッ

トはすごくおもくではこぶのがたいへんでした。手がいたくてとてもつかれました。でもグループのみんなですいしよに力をあわせて台まではこびました。あいずをしあったり「がんばろう。」といたりしながらはこびました。おもくてたいへんだったけど、ぼくは、うれしい気もちになりました。みんなで力をあわせてさいごまではこぶことができたので「やったぞ。」といううれしい気もちになりました。

ぼくは、へいわでいるためには、みんなで力をあわせてらいいんじゃないかとおもいます。そうしたらうれしい気もちやたのしい気もちになったりするとおもいます。それに、友だちともつとなかよくなれるとおもいます。

ぼくは、へいわだと気もちよくくらするとおもいます。だから、友だちと力をあわせてせいかつしていきたいと思います。二学きには、たいいくたいかいがあります。ぼくはぼくのできるるところから友だちと力をあわせたいです。



◆小学生低学年の部◆

佳 作

へいわを

島根県雲南市立  
飯石小学校 二年

渡 わたな  
部 べ  
哲 てつ  
也 や

ながいはかせののこされた言ばはたくさんあります  
が、その中で、ぼくが一ばんすきな言ばは、「へいわを」  
という言ばです。

今でも、すごいたたかひをしている国をニユースでよ  
く見ます。ぼくとおなじくらいの子どもが、じつとこち  
らを見ていました。ぼくは、何もできません。ながいは  
かせはこれをどう思っておられるでしょう。きつと、か  
なしいことでしょう。

せんそうは、けんかが大きくなったものだと思います。  
はかせはなぜ、「へいわを」という言ばをのこされたのか、  
ぼくは、かんがえました。それは、はかせが、この先ずつ

と、せんそうがないことを、心からいのつておられるか  
らだと思えます。だから、けんかが大きくならないよう、  
話し合いでなかよくなればいいと思えます。

ぼくは、お兄さんとよくけんかをします。だけど、あ  
とから、お兄さんはぼくにおやつを作ってくれます。そ  
んな時、ぼくは、「ありがとう。」と言います。お父さん  
は、そんなぼくたちをえがおで見えています。

学校でも、友だちとよくけんかをします。だけど、か  
ならず、「ごめんね。」を言います。ごめんねを言わない  
と、ずっとけんかがつづいているようで、いやな気がし  
ます。ごめんねを言う時は、ちょっとゆうきがいますけど、  
言ったあとは、とてもすつきりします。

このまえ、みんなではかせの家の草とりに行きました。  
ぼくは、はかせがどこからか見ておられるような気がし  
ました。だから、

「今、ぼくたちはへいわだよ。」  
と、つたえました。

今、ぼくの家ぞくは、みんなしあわせで、それがぼく  
のしあわせです。学校で、「今のへいわ」について、べ  
んきょうした時、家ぞくみんなに聞いてみました。そ

したら、みんなは、けんかはしてもすぐになかなおりを  
するし、家ぞくみんなが元気でわらっていられるから、  
今がしあわせだと言いました。ぼくは、本とうにほつと  
しました。

はかせの家には、はかせのお父さんのこされた言ば  
ものこっています。「以愛接人」という言ばです。これ  
はきつと、だれにもやさしくすることが、へいわにつな  
がるんだよと言っておられると思います。

だから、ぼくも、そういう人になりたいです。たとえば、  
学校であそんでいた時、ボールをかしてもらえない友だ  
ちがいたので、ぼくがじぶんのボールをもつて行ってあ  
げました。そしたら、その友だちは、すごくえがおになっ  
てくれたので、ぼくもえがおになりました。ぼくのまわ  
りにいる人が、みんなえがおになれたらいいです。こん  
なことが、「へいわのたね」になると思います。たねをいっ  
ぱいまいて、大きくそだてていったら、国中のみんなが  
しあわせになると思います。そして、いつかせんそうを  
している国もなくなると思います。ぼくは、このへいわ  
のためにがんばります。はかせ、見ていてください。



## 最優秀賞

### やさしさと笑顔の力

島根県雲南市立

三刀屋小学校 六年

田<sup>た</sup>  
中<sup>なか</sup>  
太<sup>たい</sup>  
士<sup>し</sup>

僕は、膝に分裂膝蓋骨という厄介なものを患っています。この分裂膝蓋骨は、動くときと激しく痛みを発するので、やりたいことも自由にできません。

僕は、四年生のころからスポーツ少年団で野球をしています。そのころから、膝が痛くなりました。でも、球拾いをし、大会でも応援ばかりでしたが、みんなと同じ状況で心が通じ合い、楽しく練習していました。

そして、五年になったとき、膝の痛みが治まり、試合にも少しずつ使ってもらえるようになりました。その後また再発して、六年生になった今は、一緒に球拾いをしていた仲間は、試合に出ています。僕はいつも球拾

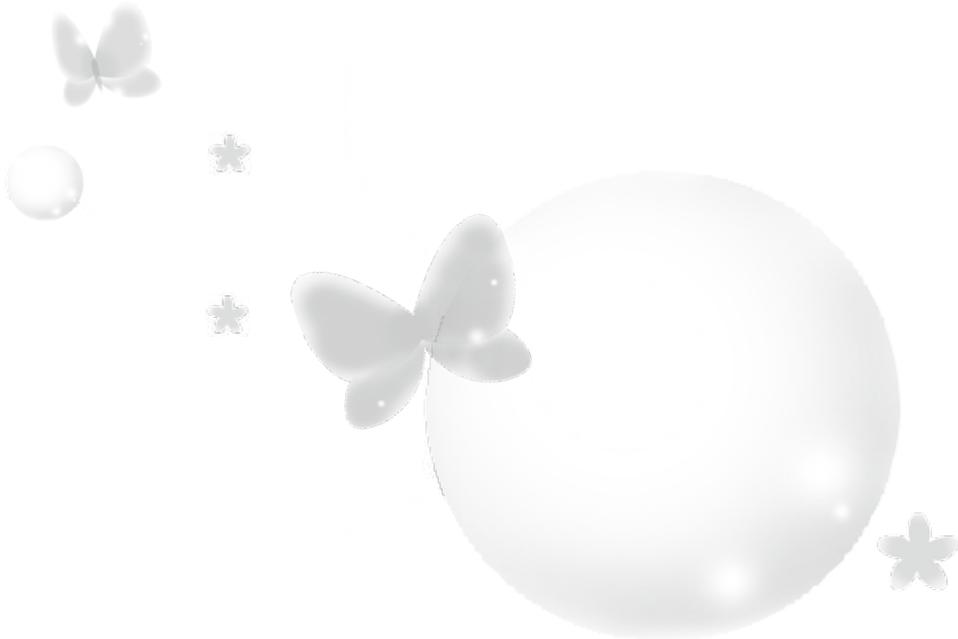
いばかりで、試合には出れません。「せっかく試合に出れるようになっていたのに。」と胸を締めつけるような悔しい思いがとまりませんでした。また、思うように練習に参加できない日が続く、本当は大好きな野球も「どうせ、できないから。」と思う日も多くなりました。ときには友達から「さぼりだろ。」「本当はもう治ってるんだろ。」などという言葉を言われることもありました。僕は、本当に傷つきました。

でもある日、直人君が「足、どう?」とか、智也君が、僕が重たい荷物を持つとうとすると周りの人に「たいちゃんにもたせるなよ。」と言ってくれ、僕のことを気遣ってくれて、声をかけてくれました。それを聞いて僕は、硬くなった心がやわらかくなって、ほんわりとした気持ちになりました。自分のことを理解してくれて、気遣ってもらって、とてもうれしいことだなと思いました。

僕の妹は、最近までみんなと歩いて登校することができませんでした。家族は、心配して、いろいろな対策を練りました。ある日、突然、妹が歩いて学校に行きました。母が、「なんで歩いて行けたかね。」と聞くと、「よくわからんけど、お兄ちゃんが、笑って、ちよっと手を

引っ張ってくれたから、行けた。」と言いました。僕はそれを聞いて、ちよつと照れくさかったけど、うれしかったです。妹が突然歩いて行けたから、笑顔の力ってすごいと思いました。ぼくが妹の気持ちを察して手をひいたからかなと思いました。妹が歩いて行くようになったことで、家族も明るくなって、みんなが妹を褒めることが多くなり、身近な人が笑顔でいることは、とてもいいことだなと思いました。

困っている人にも、弱い立場の人にも、強い立場の人にも、みんなそれぞれ思いがあります。直人君や智也君が僕にしてくれたように、僕が妹のことを考えて笑顔で接することができたように、これからも、相手の立場に立って考え、そして、笑顔でやさしく声をかけることが大切だと思いました。そうやって、友達も妹も父も母も祖父母も、みんな笑顔でいることが僕にとつての平和です。これからも、くじけそうなことがあっても、相手を思いやる気持ちを忘れずに笑顔を届けたいです。



◆小学生高学年の部◆

優 秀 賞

ひいおばあちゃんを助けついで

島根県雲南市立

掛合小学校 四年

石<sup>いし</sup>飛<sup>とび</sup>花<sup>は</sup>菜<sup>な</sup>

私には、九十六才になるひいおばあちゃんがあります。松江の日赤病院のかんご師で、

「若いころ、戦争に行つて、けがをした人を助けていたんだよ。」

と、二年生のころ母から聞きました。その時は、「へえ、そんなことをしていたんだ。」と思つたくらいでした。

四年生になった今、永井博士の本を読み、ひいおばあちゃんのことを思い出し、「戦争の時どんなことをしていたのだろう。」と、もっとくわしく知りたくまりました。今は、木次の病院に入院しているので、代わりにおじいちゃんに聞きました。その話はおどろくことばかりでし

た。

ひいおばあちゃんは、けがをした兵隊さんを助けるために、船で中国にわたつたそうです。日赤のかんご師として、はずかしくないように、仕事をがんばっていたそうです。ひどい傷を負ってくる人や時には死にそうな人も運ばれてくる中、必死で手当をしていたひいおばあちゃんを「すごいなあ、えらいなあ。」と思います。目の前で苦しむ兵隊さんを助けたい思いでいっぱいだったと思います。と同時に、心の底では「残こくな戦争は、いやだ。」と思つていたのではないかと思います。

私は、図書室で、「はだしのゲン」を見たり、広島で原爆くドームのやけこげたかべを見たりした時、心がぞくぞくしました。私は想像しただけでこわいのに、ひいおばあちゃんは、毎日のように残こくな姿を見て手当をしていたとは、本当におどろきました。

おどろいたのは、それだけではありません。

病院がねらわれたとき、手りゅう弾をもっていたこと。中国の捕りよになって、戦争が終わつても、しばらく日本に帰ることができなかったこと。その時、青さんカリと髪の毛とつめをもっていたこと。「死を覚ごして、毎

日を生きていたんだ。」と、おどろきました。

だからこそ、人一倍命の大切さを感じていたのだと思います。

永井博士の学習をきっかけに、ひいおばあちゃんの話を受けてよかったです。また、人をつらくする戦争のおそろしさを今まで以上に感じました。

私は、今平和なくらしをしています。でも、時々乱暴な言葉を耳にすることがあります。言われて悲しい言葉もあります。

「あっちいけ。」「死ね。」

とか。びつくりします。生きたくても生きることができなかつたたくさんの兵隊さんを見てきたひいおばあちゃんが聞いたら、どんなに悲しく思うでしょうか。

私は、ぜったい言わないし、言っている人がいたら、注意をします。私のひいおばあちゃんのやってきたことは、人を大切にすることです。それを受けついで、今の私にできることを行動します。永井博士と同じ気持ちを持つていたと思います。これまでその話をきかせてくれることはなかつたけど、今度お見舞いに行ったら聞いてみようかなと思います。



## 佳作

## 平和を作るには

島根県雲南市立

吉田小学校 六年

吉<sup>よし</sup>田<sup>だ</sup>千<sup>せん</sup>之<sup>の</sup>輔<sup>すけ</sup>

永井隆博士の学習をする中で、「如己愛人」という言葉に出会いました。如己愛人って何だろう。どうしたらできるんだろう。博士はどうして迷わずに人のために行動できたのだろう。僕はそのことを考えてみました。

博士は、原爆投下後の長崎で、自分は白血病になっているのに進んで動いてけが人の救護にあたっていました。他にも、中国との戦いの中でも中国の人も助けていたと知って、これが如己愛人だと思いました。でも僕は、博士のように、自分のことより他の人のことを考えて助けるということをする時、迷うと思います。自分が頑張ったからといって、本当に助けられるのか、自信が

ないからです。

でも僕にも、一度迷ったけれど他の人のために行動したことがあります。一人の友達が友達にけられたり叩かれたりしているのに我慢して手を出さずにいた時です。僕は叩かれている友達の気持ちが分かったので、その人をかばって、いじめている人を止めました。その時、言葉でからかわれたりしたけれど、友達を助けることができたという気持ちになりました。勇気が必要だったけれど、やってよかったという気持ちになりました。

でも今、よく考えてみると、叩いていた人の気持ちも少し分かる気がするのです。その人は転校してきたばかりで、友達も少なく、遊んでほしい気持ちがあったから叩いたりしてアピールしていたんじゃないかなと思うのです。その気持ちに気付くまでは、その人を避けたり無視したりしていました。でも今は、それではいけないと思うようになりました。

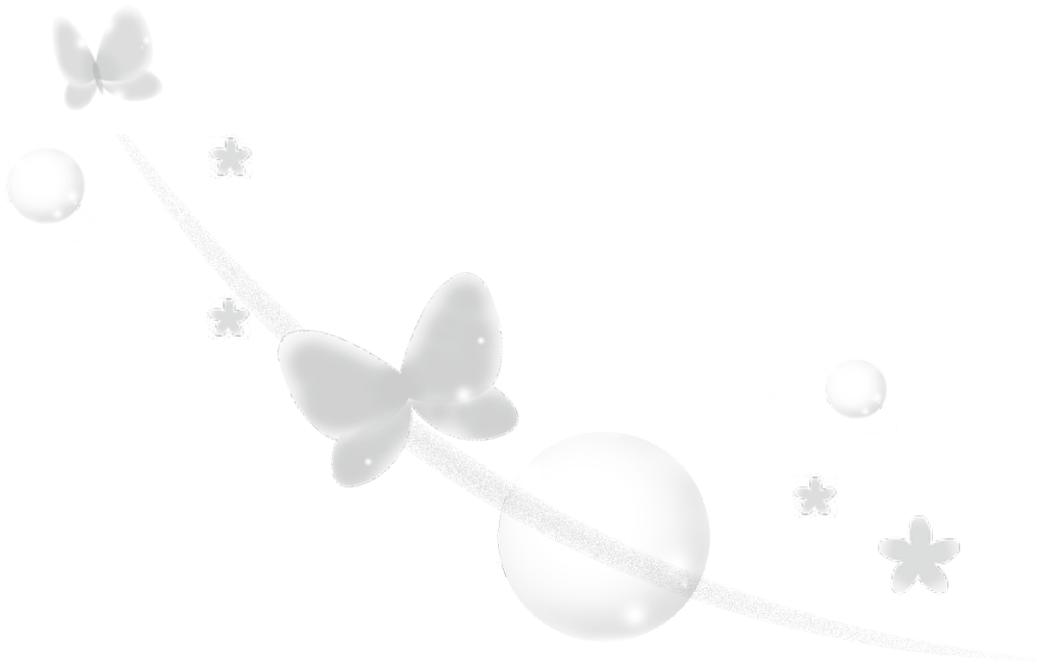
僕は、平和は片方だけに味方をするのと、逆にいじめている友達を差別するようになってよくないと思います。だから六年生になってからは、からかわれることを恐れず、お互いの気持ちを考え、よくないことは注意して止

めることができるようになりました。一度その友達を助けたら、迷いも消えてできると思えるようになったし、お互いのためにも注意することはいいことだと思えるようになったからです。今では、その二人も僕も仲良くなることができました。

平和は、口ではとても簡単に言えますが、実際に平和な世界を作ろうとするととても難しいということが、この体験でよく分かりました。僕一人の力では、二人の関係をよいものにするのが精一杯です。でも、修学旅行の時、被爆体験者の方から、

「みんなで平和を作ってください。平和の大切さに気付いてもらうために、私は話をするのです。みなさん、今、感じた思いを広げていってください。そして平和を作ってください。」

と言われました。僕は、一人で平和を作るのはとても難しいことだけれど、たくさんの人と協力すれば、少しずつ変えていくことができると感じています。これからは、自分も、相手も大切に、双方がよい気持ちになれるように意識して過ごしていきたいと思います。



佳作

言葉の兵器

島根県雲南市立  
西小学校 六年

上じょう代だい  
雄ゆう  
暉き

ぼくは、時々、言葉の兵器を使います。

多くの言葉の兵器は、自分で使おうと思う時も、そうではなく、かってにぼくの口から飛び出してしまう時もあります。

この兵器は、さらにやっかいなことに、相手の体を傷つけたり、まわりの物がこわれたりすることはないので、何がやっかいなのかと言うと、時々、相手を傷つけたことすら自分でわからない所なのです。

ぼくは、この間、友だちとけんかをしました。その時、ぼくはこの言葉の兵器を使いました。この攻げきの結果は、友だちの顔はさっと変わって、一週間、口をきいて

もらえなかったのです。

ぼくは、その友だちにあやまりました。とても優しい友だちだったのでゆるしてくれました。ぼくは、本当にほっとしました。なぜなら、ぼくが言われていたら、絶対にゆるさないと思うからです。一生口をきかないと決心すると思うからです。

言葉の兵器は、恐ろしいものです。一度発しゃしてしまくと、二度と止めることはできないのです。この時もそうでした。

「ばか、アホ。」

と友だちに言ったしゅん間、もう取り返しがつかなくなってしまうのです。

「そんなつもりじゃなかったのに。」

「傷つけるつもりはなかったのに。」

何度後悔しても、もう後の祭でした。

戦争は、鉄ぼうや大ほう等の武器で相手の命をうばいます。もっと恐い原子爆弾は、何十万人という命を一しゅんでうばってしまいました。

なぜ人は、戦争をしなければいけないのか、なぜ命をうばい合うのか、ぼくにはよくわかりません。

六年生になって歴史の勉強をしています。昔からずつと人は戦争を続けています。

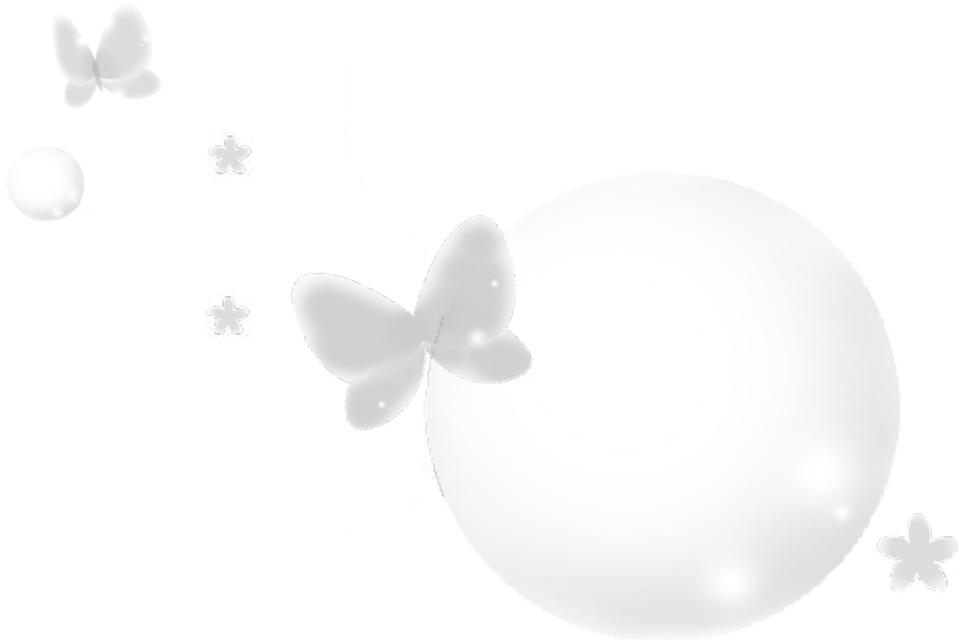
なぜなのかは、まだよくわかりません。

でも、ほくにできることは、自分がもっている言葉の兵器を使わないことだと思います。自分が気づかない所で、実はこの兵器を使ってしまうかもしれないかもしれません。それはとても恐いことだと思います。

だからと言って、言葉を使わないこともできません。友だちや家族と話すことはとても楽しいです。くだらない話で大笑いしたり、ほめられてうれしくなったりします。一日中一言もしゃべらなかった日はきつくないと思います。言葉で自分の思いを伝えたり、相手のことがわかったりできます。

きつと言葉の兵器は、けんかをしたり、イライラした時に飛び出してくると思います。

そんな気持ちにならないように、たとえそんな気持ちになったとしても、相手を傷つける言葉の兵器は使わないと、ほくは決心しました。



◆ 中学生の部 ◆

最優秀賞

平和のとりで

広島県

盈進中学校 二年

池<sup>いけ</sup>田<sup>だ</sup>風<sup>ふう</sup>雅<sup>が</sup>

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」国連ユネスコ憲章に記された一節。僕はこの言葉を胸に、今年も活動する。

僕は昨年から、「核廃絶！ヒロシマ・中高生による署名キャンペーン」に参加している。炎天下、広島や福山の街頭に立ち、笑顔で大きな声を出し続ける。十人書きの署名用紙がどんどん埋まっていくとますます元気になる。

街頭に立つと、さまざまな意見に出会う。「核廃絶は無理」「中学生はこんなことせずに、家で勉強しとけ。」

さらには「中国や北朝鮮に対抗するために、日本は核武装すべき」等々。

被爆者の方にも出会う。「暑いのにたいへんじゃね。ありがと。」最高にうれしい瞬間だ。僕は、人と人とのつながりこそ、世界を平和にしていく原動力になると信じている。

「戦争の好きな人間がもとおるものか。だれだつて無造作に殺されるのは好かぬだろう。また直接何の恨みもない相手を出会い頭にいきなり殺すことも好かないよ。（中略）個人的な殺人は大罪なのに、集団的な殺し合いが罪でない、とはどうして言えるのだろうか？」（永井隆著「この子を残して」中央出版社二〇五項）。僕の大好きな一文だ。

新聞で原爆小頭症患者に関する記事を読んだ。『この子を残して』と重なった。原爆小頭症は、妊娠初期の母親の胎内で近距離被爆したことにより、頭が小さく知的障がいなどの複合的な障がいを持って生まれた人々のことだ。川下ヒロエさん（六十八）はその一人。母親の兼子さん（享年九十二）は今春、亡くなった。生前の兼子さんは娘の将来を心配してこう話していたという。「こ

の子が一人になったときのことを思うと本当に不安で……」（『毎日新聞』二〇一四年七月二十三日）。原爆は、そして戦争は六十九年経った現在も、人々を苦しめている。

僕は、署名活動の他に、県外の方に広島平和記念公園内の碑めぐり案内をする活動もしている。今年三月、岐阜、三重、愛知の小学生を案内させていただいた。みんな熱心にメモを取ってくれていた。僕の説明にも熱が入った。被爆者の國重昌弘さんからうかがった被爆体験も伝えた。「被爆直後、広島や長崎には七十年は草木も生えないと言われていた。だから、道端に生えた一本の雑草を見て元氣付けられた。ケロイドのせいで（自分が被爆者だということ）嫁が迎えられないと聞いて、ケロイドを隠すために夏でも汗を流しながら長袖を着た。あなた方にお願ひがあります。今日ここで聞いたことを、一人でも多くの方に伝え、広めてください。それこそが世界の核を封じ込める第一歩になるはずです。」

あの忌まわしい戦争を二度と起こさないために、僕たちは何をすべきであろうか。僕たちの「未来」は「いま」から始まる。過去を知り、今を見つめ、未来の平和のた

めに行動すれば、きっと平和の環が広がり、平和な世界は実現できると僕は信じている。

核廃絶署名活動でも碑めぐり案内でも、僕が大切にしていることがある。それは、被爆者の平和への願いを自分の言葉で伝えること。「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない。」この復讐と敵対を超えた素朴で崇高な思想を僕自身が胸に刻み、次の世代を担っていく自覚を持って行動すること。僕は、それが、「心の中に平和のとりでを築くこと」だと考えている。

今、日本は大きな岐路に立っているのではないだろうか。集団的自衛権の行使容認が閣議決定された。考え方は人によってさまざまだろう。でも僕は、日本国憲法の平和主義を日本の宝、世界の宝だと誇りに思っている。あの悲惨な太平洋戦争の教訓から、日本は平和主義を手にしたのだ。

未来を担っていくのは僕たちだ。だから僕は、被爆者の平和への思いを胸に、これらの活動を継続していく。

優 秀 賞

残された蝶

島根県大田市立

第三中学校 三年

武<sup>たけ</sup>田<sup>だ</sup>神<sup>かぐ</sup>楽<sup>ら</sup>

蝶には「再生」という意味があるらしい。さなぎから蝶へと生まれ変わる。そんな蝶が描かれた着物を女性は着ていた。

女性の瞳は死んでいた。

今年の五月中旬。私は二泊三日で沖縄県へ修学旅行に訪れた。沖縄県は日本で唯一、地上戦が行われた地でもある。

最初は、広島や長崎の原爆、東京の空襲と大差ないのではないかと思っていた。しかし、地上戦には、それらとは違う恐ろしさがあった。

修学旅行二日目。私は佐喜眞美術館を訪れ、その絵を

見た。題名は「沖縄戦ノ図」。私は、館長さんの解説を、ひたすら聞き続けた。

その図は、すべての人や物を黒で描いていた。しかし、火や血といったものは鮮やかな赤で描写していた。そんな赤が流れる中、人々は生きながらにして死んでいた。

女性がいる。二人。親娘<sup>おやこ</sup>だろうか。首を絞め合っている。館長さんの口調は静かだ。淡々としていた。

一緒に死のうとしています。こんなことは、全て無意味なのに。

会場中がしんとした。

例えば、二人で首を絞め合います。力一杯絞めます。

苦しい。一人死にます。もう一人はどうでしょう。

館長さんは図の前を横切るように歩き出した。

死ぬということは、力が入らなくなるということ。生き残った人は、もうその人には殺してもらえない。娘が

死ねば母は、自分が娘を殺したと自覚する。逆に、母が死ねば娘は、自分が母を殺したと思う。自分の手は、最

愛の人の首を絞めている。この人はもう、この世にはいない。外では銃の音が響いている。あなたは どう思いますか。

館長さんが語り終えたとき、寒気がした。凶の中には、赤ちゃんを殺す女性もいた。誰かが手を下さなければならぬ。そのために、自分自身の心も殺す必要があったのだろう。凶の中の人々の瞳は真っ白で、何も無い。心が死んでいる状態だった。

館長さんは、また語り出した。

中央にいる三人の子供の瞳を見て下さい。こちらを真っ直ぐに見つめています。この子達の心は、まだ生きています。この子達は、未来を見ているんです。

三人の後ろに、蝶柄の着物を着た女性がいます。母親でしょう。蝶には「再生」という意味があります。彼女はもう死んでいます。けれど、彼女は蝶となり、三人を見守ることでしょう。これが作者の願いです。

館長さんは、涙を流していた。館長さんへの拍手の中、私は思ったことがある。

この凶は優しい。内容は残酷だが、確かな優しさがあつた。凶の人々は、皆、五体満足だった。激しい地上戦。体がバラバラになってもおかしくはないし、そう学んだ。けれどあの凶は、皆体があつた。あの着物といい、本当に優しい凶だと思った。

戦争で失われた命は戻ってこない。当時の人達は救われないだろう。

けれど、あの悲劇を繰り返すことは、許されない。たった一つの命を、あんなことで消させるわけにはいかない。

あの優しさには、二つの理由があると思う。

一つは、沖縄戦での死者、犠牲者への祈り。そして、あと一つは、もうこの優しさを使わなくても済みますように、という願いなのだろう。

## 佳作

## 改めて気付いたこと

島根県雲南市立

吉田中学校 二年

堀江菜々ほりえなな

私は、命は世界で一番大切だと思っています。長いようで短い。いつ終わりがくるか誰も知らない。それが命です。

少し前に母が入院することになりました。一週間だけでしたが、いるはずの母がいない毎日は静かで、何か物足りないような寂しい気持ちの毎日でした。

加えて急に母はいなくなるし、家事は全部私にまわってくるし、初めのころはとてもイライラしていました。私は普段から手伝いをあまりしていなかったので要領がととても悪かったです。しかし、二・三日たつと、母の大変さが次第に分かってきました。仕事から帰ってくる

とすぐに夕食の準備、洗濯と、どんなに大変だったことでしょう。母は立派だなあ、と思い始めました。

元々少し病気がちの母で、そんな母が私は嫌いで、いつも反抗ばかりしていました。母の気持ちなんて考えようともせず、いろいろなストレスやイライラを全部母にぶつけていた私は、とても自分勝手でした。

母のお見舞いに行くと、隣の病室には以前からの知り合いの人がたまたま入っておられ、お話をしました。しかし、その翌日に急に亡くなられるという出来事がありました。前の日まで点滴をしながらでしたが、歩いて、笑顔を絶やさずにお話もされていたのにもうおられません。今度は母の番なのではないか、と思うと怖くなりました。

母が無事に退院した日、家に着くと、母は「はい。これ。」と言って紙を渡してきました。

「何？」と聞くと、

「入院しているとき、もしものことがあったりしたらと思っ

て書いて書いた遺書。」と言います。初めは笑っていた私でしたが、読むと自然と涙が出てきました。「お母さんの代わりに、家族のことをよろし

くね。」とか「部活動が大変だけれど頑張ってるね」といった短い内容の手紙でした。お見舞いに行っても、病室でたくさんのお話を話し合ったわけでもなかったのです。入院中の母の心の中が少し伝わってきたような気がしました。母にもしものことがあれば、これが最後の言葉になったかもしれない、と思うと、涙がどんどんあふれてきて、自分ではとめることができませんでした。短くて普通の内容でしたが、その言葉の重みがドシツと感じられました。

私は今まで、時々「死にたい」とか「消えたい」と思うことがありました。でも母の隣の病室で、病と闘っておられた方、そして病院で遺書を書いた母の気持ちを思うとき、一度でもそんなことを考えた自分が、とても情けなくなります。

小学校のころ平和学習で永井隆博士の生涯について学びました。原爆投下後の長崎で、自らも白血病でありながら、他の人達のために懸命に尽くされたこと、病の床で幼い子どもたちのことを心配しておられたことなどを覚えています。死と隣り合わせの毎日で、恐怖や不安が襲ってきたことでしょう。私も「次は母の番かも…」と

考えてしまうことがとても怖かったです。また、母があの「遺書」を書いてくれたのも、死を身近なものと感じ、私や他の家族のために何か思いを残したい、と考えたからでしょう。今生きていることの大切さ、命の大切さに改めて気づかされました。また母の愛情を感じ、私の母に対する気持ちを整理することができました。

命は一人に一つずつしかなく、誰かにあげたり、お金で買ったりすることはできません。「生きたい！」と思っ  
ていても死ななければならぬということもあります。いつ死  
がやってくるのか、誰が死ぬのかも分かりません。私は  
今生きて、命があることのすばらしさ、すごさがようや  
く分かりました。母の入院という出来事がそれを教えて  
くれました。また永井隆博士についての学習を今回改め  
て思い出してみても、自分に与えられた命をもっと大切に  
考え、与えられた人生を懸命に生きたい、生きなければ  
ならない、そう強く考えます。



## 佳作

## 如己愛人で世界を変える

長崎県長崎市立

野母崎中学校 二年

福田芽衣

この青色で包まれた世界を、一瞬で暗黒の闇に落とした物は、何だろう。人々の笑顔を大きな音と風でかき消した、あの空から降ってきた物は何だったのだろうか。異国の人々の殺意が詰まった原子爆弾が、罪の無い人々の未来を奪った。

一九四五年八月九日、長崎にたった一発の爆弾が落とされた。その時の光と音と空気を祖母は覚えていた。私が祖母の体験を初めて聞いたのは、小学校三年生ごろの夏だった。祖母の家に泊まりに行った時に聞いた。私は祖母の話の途中で、「もう嫌だ」と言ってしまった。話の中の出来事から目をそむけなくなつた。信じられない

かった。でも、それを体験した祖母は、もっと私の気持ちの、百万倍、一億倍、それ以上、地獄の苦しみを受けた。そう考えると、心がきゆうつと締め付けられる感じがした。原爆とは、人の心もきれいな町並も壊す、史上最悪の殺戮兵器だと改めて感じた。私が住んでいる町は、爆心地から遠く、山と海に囲まれた、小さな町だ。私は、曾祖父を知らない。先日、私の祖父が生まれた後の原爆の時に、曾祖父がとった行動を、母が教えてくれた。曾祖父は、爆弾が落ちた翌日、遠い長崎の街を、見に行つたそうだ。その時、曾祖父が、何を見、何を思ったのか、私には分からない。戻ってくると、体調を崩したそうだ。原子爆弾が落ちて、時間がたつていても、放射線を浴びていた。この爆弾には、奇跡的に生き延びられた人々に、更なる苦しみを与える放射線が入っていた。長崎はポロポロになつてしまった。

五年生の時、授業で、原爆資料館へ行ったり、講話を聞いたりして、平和学習を進めていくと、「永井博士」という人の本を見つけた。その人は、自分も原爆だけがしているのに、他の人々を助けていた、とてもすごい人だった。授業でも永井博士のことを教えてもらった。

今、とても印象に残っているのは、「如己愛人」という言葉である。自分と同じように人も愛するという意味だ。永井博士は、その精神で、たくさんの人々を助けたそう  
だ。

原爆は、たくさんの人々の命を奪い、町を破壊し、人々の心に、深い傷を負わせた。私たちは、原爆を体験した人々の思いを引き継ぎ、それを後世に伝え、原爆の恐ろしさと、命の大切さを教え、今後、こういう悲惨な出来事を起こさないように、と警鐘を鳴らすことができる。いつまでも原爆を憎んでばかりではいられない。少しでも、進歩しないと、意味がない。

そのために、この大きな世界にとって小さな私たちが  
できること。それは、一人一人が他の人の命を考えること、自分の命も考えること。「如己愛人」の精神で生きること……。

私は思う。一人一人の力は小さくても、みんなで頑張れば、原爆以上に、人々の心を動かす力になると思う。たった一つの原子爆弾より、たった一言の言葉が、世界を変える。そっちの方が、格好良いのではないか？ 私たちは、世界を変えることができるのだ。しかも、辛く

ない、誰の心にも傷一つつかない。とても良いことだと思  
う。

私は、永井博士と、永井博士の言葉に出会えて、良かったと思う。私は、世界を変えて、戦争の無い、平和で美しい世界にリフォームしたい。この作文も、世界を変えるための、小さな力の一つとなって欲しいと私は思っている。みんなの心に「如己愛人」の灯を灯もしていこう。



最優秀賞

曾祖母の涙

沖縄県

未来高等学校 二年

高たか嶺みね真ま帆ほ

六月二十三日。正午。私達沖縄県民は、多くの戦争犠牲者の冥福を祈るとともに、永遠の平和を願い一分間の黙祷を捧げる。

六十八年前、日本で唯一の地上戦が行われた場所、沖縄。今では、豊かな自然に溢れ、美しいサンゴ礁に囲まれた南の島として広く知られている。町を歩く人々は皆、幸せそうだ。しかし、そんな「平和」の裏には、悲惨な戦争の痕跡が数多く残されている。

私には、深く尊敬している人がいる。家族で唯一の沖縄戦体験者であり、戦前・戦中・戦後の沖縄を懸命に生き抜いた曾祖母だ。当時、三十歳だった彼女は「鉄の暴風」

と言われた戦場を六人の子供達と共に必死で逃げ回ったと言う。しかし、敵・味方、病気などありとあらゆる死が蔓延している状況下、子供達は一人、また一人と命を落とし、結局、無事生き延びられたのは祖父と妹の二人だけであった。今の私は、幼いながらも懸命に生き抜いた祖父、そして子供の命を最後まで守り抜いた曾祖母がいたから存在する。しかし、私の知っている曾祖母は当時のその様な苦勞など、みじんも感じさせない優しく暖かい人だった。私は、彼女の涙を知らない。あまりにも目まぐるしく変わる時代の中で「泣く」という事を忘れてたと言う。時折、遠くを見つめ、何とも言えない悲しく、切ない表情を見せる。それは「戦争」が彼女の心の奥深くに刻んだ、一生消えない痕跡である。戦争体験者の中には、あまりにも残酷な光景を見てきたが為に、多くを語りたがらない人やPTSDに苦しみ、眠れない夜を過ごす人々もいる。

その痕跡を今に伝えるようにして立つのがかつて激戦地であり、終焉地ともなった摩文仁の丘に建つ「平和の礎」である。国籍や軍人・民間人区別なく礎に刻まれた全戦没者の氏名。その刻銘者の多さが沖縄戦の残虐さを

物語っている。そこには、沖縄戦で徴兵され、帰らぬ人となつた曾祖母の夫、つまり私の曾祖父の名前もあつた。しかし、ごまんと並んだ多くの刻銘の中で、その名を見つけて出すのは並大抵のことではなかつた。その時、私はある一枚の写真と新聞記事を思い出した。

それは、私達の前では一滴の涙も流さなかつた曾祖母が平和の礎の前で、泣き崩れている写真である。記事は「命どう宝」と題され、命の尊さを胸に止め、多くの戦争犠牲者が願っていた平和を維持していくことの大切さを強く訴えている。沖縄戦で若くして夫を失い、女手一つで子供達を育て上げるのは並大抵の苦勞ではなかつただろう。多くの悲しみを抱えながらも懸命に生き抜いた曾祖母が見せた初めての涙。ここに命の存在があつたことを認めてくれる、確認させてくれるという何とも言えない思いがあつたのではないだろうか。私も同じ場所に立ち、曾祖父の名前に指が触れたとき、遠い存在に感じていた曾祖父にぐっと近づけた気がして思わず、涙が溢れた。戦争を生き延びた人々は、終戦から六十九年経つた今でも、こんな思いを抱き、忘れられない恐ろしい光景や悲しみを背負って生きている。激しい銃撃戦や家族・

友人の死も目の当たりにしただろうし、空腹の日々だったと思う。そんな極限状態で彼らが何を思ったのか、考えられずにはいられない。自ら命を絶たなければいけない状況をつくつてしまう戦争。多くの命をいとも簡単に奪つていく残酷さで悲劇を生み出す戦争。これは、絶対に許されない行為である。

私が住む沖縄県は、学校での平和学習に力を入れている。昨年、その一環の現地学習として、糸満壕の中を見学した。そこは、昼でも中の様子が分かりにくく、冷たく、湿っていて、すぐに外に出してしまった。しかし、その壕も戦時中は確かに使われていたのだ。暗闇の中ぎゅうぎゅう詰めになりながら、多くの人々が恐怖に慄いたと言う。実際に壕の中の見学途中に、集団自決や住民虐殺の現場も何度も目の当たりにした。長い間、沈黙したまま土の中に眠る犠牲者は、今もどこかで戦争の苦しみから抜け出せずにいる。沖縄戦により、奪われた約二十万の尊い命。この命にはどれだけの夢・可能性、そして未来が詰まっていたのだろうか。生きてさえいたら、沢山の喜びや幸せを手にしていただろう。それを戦争はいとも簡単に奪うのだ。二十万の命に見つめられた時、私は慄然と

した。

戦争体験者は年々減ってきている。そんな中で今、沖縄では基地・不発弾処理・遺骨収集など、まだ解決されていない課題が数多くある。そして、世界では今もなお戦火の中に消えていく命が後を絶たない。だからこそ、次の世代を担う私たちには、戦争の悲惨さと平和の尊さをこれから「継承」していくという重大な使命がある。その問題解決の為に、二度と戦争で苦しむ人が出ない時代にする為にも、もっと戦争と平和について学んでいかなければならない。そして私は、曾祖母の涙の意味を決して忘れずに、後世へと伝えていく語りべになりたい。

◆ 高校生の部 ◆

優 秀 賞

語り部

東京都

日本大学櫻丘高等学校 一年

寺 てら  
迫 さこ  
晃 きら  
良 ら

今日、首都圏へのオスプレイ飛来のニュースを知った。しばらく耳にしなかった名前である。東京の静かで平和な空を眺めながら、小学四年生から中学三年生迄過ごした沖縄の青く澄んだ空を思い出していた。同じ国であるのに、住む地域によって平和に対する温度差に大きな隔たりがあるものだと感じた。

なぜなら、私が住む首都東京は政治、経済の中心であることから、日本で一番安全で平和な街だからだ。外国の軍事車両や戦闘機の音を聞くことはない。沖縄から転居してはや四ヶ月、身も心も平和な空気に包まれている自分がある。周囲の人たちは、首都圏にオスプレイが

飛来するまでは、オスプレイという言葉に反応することはほとんどなかったと思う。他人事、よその国のことだと思っても不思議はない。東京では、マスコミから入ってくる情報でしか分からないから当然ではないだろうか。

しかし、沖縄での生活では、自分の五感で戦争や恐怖を感じざるを得なかった。私は、本土から移住したからこそ、敏感にかつ奇異に感じていたが、うちなーんちゅ（元々の沖縄県民）は、日常生活に溶け込んだ風景に慣れ淡々としていて、とても不思議だった。きらきらしたリゾートの島からは想像できない真逆な二面性があった。

ある日、小学校のプールで背泳ぎをしていると、突然、巨大な米軍輸送機が目の前に飛び込んできて、泳ぐのを忘れて立ちすくんでしまったことがある。

また、知り合いのアメリカ人家族と訪れた米軍保養施設の公園で望遠鏡を覗いていたら、突然、海面に潜水艦が浮上してきて、映画のワンシーンではないかと目を疑ったことがある。本土では、絶対に見ることができない光景に言葉を失ってしまった。子供ごころに戦争が始

まるかもしれないと心配で眠れない日々が続いた。

中学生の時、ソフトボール部活動中に何度も飛び交うオスプレイに向かって仲間たちと一緒に

「オスプレイNO」

と叫んだ。オスプレイの鈍い爆音に掻き消され、私たちの声は決して届くことはなかった。そして、オスプレイ導入反対を叫ぶ沖縄県民の声も全く無視されてきた。沖縄では、日常茶飯事に起きている普通の風景である。東京でも同じことが起きていたら、どうなっていただろう。同じ日本にいながら、一部特定の地域だけが国の負の遺産を請け負い、国の平和のために危険にさらされ、我慢を強いられることは不公平であると思う人は誰しも自分の身に災難が降りかからなければわからない。私自身もそうであった。

被爆者となり白血病を患いながらも己のごとく人を愛することを説いた永井博士の「如己愛人」の精神を受け継ぎ、一人でも多くの人が本当の平和を実現するために何をすればいいか考えていけたらと思う。少なくとも平和な社会を維持するために犠牲となっている人たちがいることを知り、痛みや苦しみを共有することはできるはずだ。

ずだ。

平和学習で訪れたひめゆり平和祈念資料館では、今でもひめゆり学徒隊の生存者の方々が、戦争中の悲惨な体験を語り継ぐ語り部として活動されている。八十歳を超える高齢の為、戦争体験者や語り部の人数は、日々減少しているという。曲がった背中に杖をつきながら、見上げた空に、戦後七十年経った今もなお、飛び交う米軍機を見て、一体何を感じてみえるのだろうか。二度と戦争という過ちを起こさないため、誰よりも忘れないはずの辛い過去を語って下さった優しい笑顔を思い出すと、胸が苦しくなった。そして、沖縄に移り住み、住んだ人にか分らない哀しみや苦しみを感じた私だからこそ出来る語り部の一人になれたらと思うようになった。本土で住む人たちにマスコミの情報だけでは伝えきれない沖縄の本物の姿や平和への思いを伝えていきたい。そして、改めて、東京の空を見上げながら、世界中が平和でありますようにと祈り続けた。



◆ 高校生の部 ◆

佳 作

平和はすばらしい

愛知県

滝学園滝高校 一年

伊藤 藤正子

朝、寝ぼけ眼で階下に降りた。いつも通り、お弁当を作ってくれている母は、ニュースを見ていた。

「おはよう。」

母は、小学校で教員をしている。朝は一秒だって惜しいはずだ。そんな生活をしているのに、私が中学校に入学してから、母の都合でお弁当がなかったことは一度もない。私は、広島と長崎の原爆資料館で真っ黒なお弁当箱を見た。物資が不足していた時代に詰められたお弁当。炭化したご飯から、少しでもお腹いっぱい、少しでも栄養のあるものを、というお母さんの愛を感じた。私のお弁当には、甘い卵焼きが必ず入っている。私のリクエ

ストだからだ。入学して知った顔が一つもない教室で、この卵焼きを食べると、ほっとした。お弁当は、戦時下でも今でも、親の愛がたまっているのだ。

今日も、あの卵焼きのにおいがする。幸せな香りが、鼻孔をくすぐった瞬間、気分を台無しにするニュースが耳に入ってきた。

「横浜市の中学生が、長崎県の語り部に暴言を吐きました。」

修学旅行で、長崎を訪れていた男子中学生が、語り部である森口貢さんに「死にぞこないのくそじい」との暴言を浴びせ、話を聞いていた他の生徒に「お前たちも笑え。」「手を叩け。」とはやし立てたと、報道されていた。同じ世代の生徒が本当にやってしまったのだとしたら、残念だと思った。戦争や原爆について、知ろうとしなければ、何も知らぬまま大人になってしまう。そんな世代なのだ。

私は、昨年の修学旅行で、下平作江さんという語り部の方のお話を伺った。下平さんは十才のとき、壕で妹さんと一緒に被爆されたそう。自宅にいたお母さんやお姉さんは亡くなられた。長崎大学医学部で被爆されたお

兄さんは帰宅後数日で亡くなられた。その後、一緒に後遺症と闘っていた妹さんも、後遺症や戦争によってもたらされた貧しさを苦に自殺された。

下平さんのお話で印象深かったのは、被爆の苦しみは生涯続くということだ。そして、それは、次の世代にまで影響するということだ。家族を失い、被爆の後遺症と闘い、偏見に苦しむ。被爆された方の中には、広島や長崎の出身だということを隠して生きていた方もいると聞いた。自分は何もしていないのに、自分の過去を偽らなくてはならない。それほど厳しい偏見があったのだと驚いた。

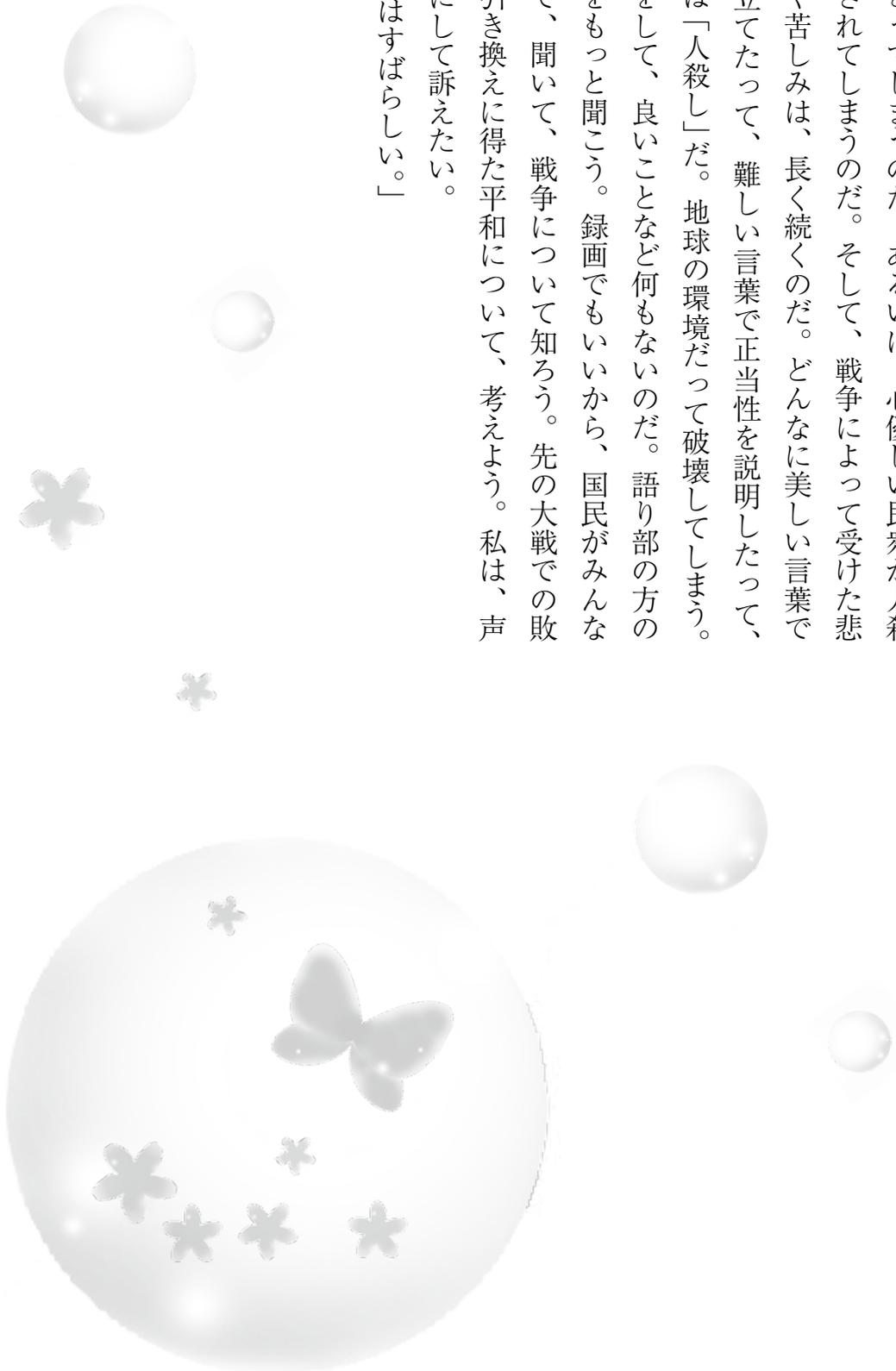
私は、原爆に関する本も、年齢の割には読んでいるし、原爆資料館にも行った。原爆のことは、少しは知っているつもりだった。でも、本当の苦しみというのは、被爆された方のお話でなければ伝わらないと感じた。悲しい過去をたどるのは、つらいに違いない。思い出したくないことも、たくさんあるに違いない。忘れてしまえば、楽になるだろう。それを乗り越え、昭和二十年八月九日に何が起こったのかを伝えてくださった下平さんに感謝した。

修学旅行から帰って、祖母の家に行った。そして、祖父の仏壇に土産を供えた。下平さんより二才年長の祖父は、六年前に亡くなった。「ばあちゃん、年とったわあ。ぼけたら、どうしよう。」が口癖の祖母は、下平さんと同い年だ。失礼ではあるが、語り部の方々もかなりのご高齢だ。いつまでも、今と同じように精力的に活動していただくことはできないだろう。しかし、戦争の悲惨さ、核兵器のおそろしさをより分かりやすく伝えるのは、語り部の方をおいて他にはいない。語り部の方のお話を直接伺った方がいいに決まっている。だが、それがかなわなくなる日が来るなら、語り部の方のお話を映像で残しておくべきだと思う。

最近、日本を取り巻く情勢が、きな臭くなってきた。何の不自由もなく、毎日、高校生活を謳歌している私にさえ感じられるほどだ。世界の政治家が何と言おうと、偉い学者がどう言おうと、平和よりすばらしいものはない。私は、物資の豊かさを我慢してでも、家族と楽しく暮らしたい。友達と他愛ないことで笑っていたい。勉強は好きではないけれど、勉強をして、社会に貢献したい。戦争は、普通の生活をしている人の当たり前の日常

を奪うのだ。まっとうに生きている人間の人生を途中で切りとってしまうのだ。あるいは、心優しい民衆が人殺しにされてしまうのだ。そして、戦争によって受けた悲しみや苦しみは、長く続くのだ。どんなに美しい言葉で飾り立てたって、難しい言葉で正当性を説明したって、戦争は「人殺し」だ。地球の環境だつて破壊してしまう。戦争をして、良いことなど何もないのだ。語り部の方のお話をもっと聞こう。録画でもいいから、国民がみんなで見えて、聞いて、戦争について知ろう。先の大戦での敗戦と引き換えに得た平和について、考えよう。私は、声を大にして訴えたい。

「平和はすばらしい。」



◆ 高校生の部 ◆

佳 作

歴史に色をつけよう

愛知県

南山学園南山高校 二年

伊藤可子

十歳の夏、広島に行った。原爆ドームを見るためだ。耳をふさぎたくなるほどの蝉時雨。ガラガラ照りつける太陽。真っ青な空。あの日も、こんなふうだったのだろうか。産業奨励館から原爆ドームへと名前を変え、ハイカラな外観は躯体の一部が見えるものに変化してしまっただけだ……。思い描いていたよりも、ずっと小さな原爆ドーム。被爆した人の怒りや痛みを全て背負い、原爆のシンボルとなってしまうドーム。すぐく見たかったはずなのに、私の心は、あまり揺れなかった。

八月とあって、原爆資料館は驚くほどの人だった。迷惑になりはしないかと心配しながら、丁寧に説明書き

を読み、一つ一つの展示物をじっくりと見た。当時の私には、気持ち悪かったり、こわかったりする物や写真も……。すべては、歴史を知るために……。

妹が会いたがっていたお弁当箱のそばで、私は変わった。建物疎開作業の後片付けのために出勤していた市立中学生三人が身につけていた遺品を集めて籐の人形に着せ、一体として展示していた。初めは、被爆した少年の学生服かと思っただけ。でも、少年ではなかった。少年達だったのだ。三人分の遺品を集めても、一人分にもならないという悲しい展示だ。学生服は、元の色が分からないほど色あせ、ところどころ焼け焦げて、ぼろぼろになっている。黄ばんだようなセピア色の学生服。左胸の下の辺りには、どす黒い血痕が残っている。帽子とベルトを遺した人、学生服を遺した人、ゲートルを遺した人。三人で一人分しか遺らなかつたなんて……。私と同年代の学生が、学ぶ権利も自由も奪われ、お国のために働いていた。どれほど無念で、くやしかつただろう。元気な姿で送り出した子どもの変わり果てた姿を見たとき、親ほどれほど悲しく、くやしかつただろう。そんなことを考えていたら、モスグリーンの学生服が真っ赤な血で染まっ

ている様子が脳裏に浮かんだ。私の中でモノクロだった戦争が鮮やかな色をもち現実のものとなった瞬間だ。

私は、戦争を扱った本やテレビ番組が苦手だった。B29から雨のように落とされる爆弾。焼け野原になった町。逃げまどう人々。広島や長崎に落とされ、町の全てを吸い上げるかのように立ち上っていくキノコ雲。もしかしたら、カラーの映像や写真を見たかもしれないのに、私の中では、そのどれもがモノクロだった。現実を起こったことだと頭では分かっていたが、どこか現実味を帯びていなかった。戦時下の日本は、表向きは「お国のために。」とか「名誉の戦死。」と言っているけど、家族は仲良く、人間らしく生きていたようだ。当たり前の日常が外的要因でこわされるといふ事実が悲しくて受けとめられなかった。善良な人が戦争で人を殺さなければならぬことや何も悪くない人が殺されるといふがあまりにむごたらしく感じられて、心のどこかでシャツアウトしていたのかもしれない。

モノクロの世界で歴史として片付けていたものに、色があった。色があることで、歴史が単なる歴史ではなくなった。私なりに受けとめて、感じて、考えなくては

けないものになった。グロテスクなものや争い事が苦手な私には厄介なことだった。

色を帯びた歴史は、遠慮なく私を襲った。戦争を扱った文学、テレビ番組。戦争がモノクロの世界だった頃は素通りできたのに、色を帯びた歴史は、ずかずかと私の中に踏みこんできて、私を逃れさせてくれない。

修学旅行で長崎を訪れたとき、下平さんのお話を聞いた。実際に被爆された方のお話は、深く重かった。下平さんは原爆の遺族であり被爆者だ。家族を亡くした悲しみに浸っていられない被爆者の現実。けが、偏見、後遺症への不安。その全てを乗り越え、触れられたくない過去を自ら伝える。この優しそうな人のどこに、そんな力が宿っているのだろうかと思った。下平さんは、語るたびに心の血を流している。だから、私の心を揺さぶった。下平さんは被爆の苦しさを伝えることで、原爆を単なる歴史ではなく今ある問題として捕えて欲しいと願っているのではないだろうか。

色を帯びた歴史から逃げ出したいときもある。でも、戦争を歴史として片付けてモノクロの世界へ追いやっていたら、気付けなかったものがたくさんある。人の心の

痛み、解消されない不安、偏見、価値観を根底からくつがえされた苦しみ、日本人の強さ。私は唯一の被爆国の国民として、気付くことができよかつたと思っている。もっと多くのことを知り、物事の是非を考え、世界の平和をけん引していく日本を作りたいと思う。歴史は人間が作ってきた。歴史の誤ちを繰り返さず、歴史から学び、人間の未来に生かしていく。唯一の被爆国の人間として、世界に、今もある問題を伝えていきたい。戦争への無関心をなくし、「今ある問題」にしていくことが、唯一の被爆国である日本人の使命だ。歴史にも色はある。

## 佳作

## 被爆地から伝えたいこと

長崎県立

長崎東高等学校 一年

向井晴香  
むか い はる か

七月のはじめ、集団的自衛権の行使容認が閣議決定されました。私はこの件に対し、強い憤りを覚えました。もし、日本と条約を結ぶ国が武力攻撃を受けた場合、日本がその武力攻撃に協同して反撃することが認められます。現代の武力攻撃においては核兵器を使用する事態になってもおかしくありません。私は被爆地長崎に住む人間として、絶対に核兵器を使用することは許すことができません。核兵器廃絶を訴え続ける人々の思いとは裏腹に、このような自衛権が認められた今、あの惨劇に再び近づいているように思えてなりません。

八月九日は長崎にとって、とても大切な日です。

一九四五年、十一時二分、長崎に原子爆弾が投下された日だからです。その日から七十年の間、長崎ではその時のことを忘れることなく、二度と同じことが起きないように、「長崎を最後の被爆地に」と訴えてきました。私は毎年、平和学習を通してたくさんのことを学んできました。被爆者の方から原爆について直接教えていただいた体験は忘れられません。原爆資料館、爆心地公園、その他被爆の爪痕が残る地を被爆者の方自らがガイドとなり、案内してくださる見学コースに参加しました。被爆当時の様子を実際に聞くことができ、今では想像することができないほどの悲惨な状況や原爆の威力のすさまじさを感じました。

また、私は今までに十人以上の語り部の方の講話を聞いてきました。それぞれが違う視点、例えば当時の年齢やいた場所、行っていた活動からいろんな角度で原爆投下の前後の様子を知ることができました。中でも一番衝撃を受けたのは、小学生のときに被爆された方の講話です。その方は家の中で被爆しました。とてつもなく強い爆風により、家の中の奥の方へふき飛ばされ、ガラス戸もすべて割れ、その一部のガラス片が自分の耳に刺さっ

たそうです。しかし、それよりも体全体が熱風を受けてふき飛んだせいで痛く、動くことができなかつたそうです。しかも耳の異変には人に教えられるまで気づかず。いたとおっしゃいました。私は耳の痛みをかき消すほど強い爆風が発生することに驚きました。その方は結局治療が遅れてしまい、今でも耳に包帯を巻く結果となりました。その傷は原爆の恐しさを伝えてるように私は感じました。七十年が経過する今でも被爆による怪我や病気に苦しむ人が数多く存在します。しかし、被爆された人の心の傷は体の傷よりも深いものだと感じました。その方は最後に「被爆体験を話すことは、毎回思い出したくもないことがよみがえるから本当は嫌である。けれども今後戦争が二度と起きないために続ける。」と仰っていました。こう思っただけで活動されている被爆者の方が多いです。私は身近に原爆について知ることができる環境にいます。

しかし、戦後七十年ともなれば、被爆者の数もだんだん減少していきます。そして、私達は被爆者から直接話を聞くことのできる最後の世代だと言われています。もしもこのまま何もしなければ、戦争や核兵器の非人道さ

について知らない人が増え、戦争・平和への意識が低下してしまいます。長崎では平和学習に力を入れているのに対し、他の地域ではどうでしょう。私は被爆地とその他とではとても温度差があるように感じます。この状況では本当に戦争の記憶が風化してしまいます。

長崎で被爆された方の一人である永井隆博士のことは、如己堂や資料館に行き学びました。永井博士は「長崎の鐘」「この子を残して」などの作品を残されました。自分自身が白血病に侵されながらも、平和について訴え続けました。私はこの姿に感銘をうけました。

このように被爆者の方による活動はたくさんあります。次は私達が引き継いでいかなければならないのです。後世に伝えていくためにも、被爆者の方の声を直接聞いた私達が学んだことを発信していく使命があります。現在、被爆者以外でも語り部を行う人がいます。これからはもっと、若い人が語り部を行う活動を増やし、日本で活動を活発にすべきです。そして私も被爆地長崎に生まれた者として被爆者の思いを伝えていきたいと思いません。

## 最優秀賞

語り継ぎたい戦争の悲劇

平和への願いをこめて

広島県

としながきいち  
年永熙一

昭和十二年七月、『日中戦争』が勃発。

続いて昭和十六年十二月、米・英・オランダへの戦宣言  
布告をして、昭和二十年八月の終戦まで、実に八年もの  
長い間、わたくし達の日本は戦争を続けました。

その結果、二百十三万人の軍人、軍属の尊い命が奪わ  
れていったのです。

「国土は？」と問われれば、『廃墟』と言ってよいほど  
に荒廃していました。

『人間』誰だって、生まれてきたからには、『平和に、  
そして幸せに生きたい』と思っていた筈なのに。戦争に  
よって引裂かれた愛がどれほど多かったことでしょう。

さて、戦争でどんな事があったのでしょうか。

日中戦争が始まった直後、私の義兄（姉の夫）に『召  
集令状』が来ました。彼は最愛の妻と、生後一月半の子  
供を残して戦場へと出て行きました。

義兄は戦地から戦死の一週間前まで、実にたくさんの  
手紙を送ってきています。

『南京攻略作戦』では、わが四十五連隊も参戦し、敵  
を何千、否、何万と殺した」

「戦争に来て良いことは覚え、悪いことはばかりする  
ようになった。世の中の悪いことは全部兵隊がやる。殺  
人など朝飯前だ。放火、強盗、強姦、平気でやる。悪い  
事やりながら、あたりまえの事のように思うのだから、  
戦争とは罪なものだ」と書いています。

また、「僕に銃口を向けていた支那兵を思う存分、胴  
を突いた」とも書き送っています。

結局、戦場で非情なまでの狂人的行為をしながら、彼  
もまた敵弾に斃れたのです。

夫の戦死のあとに残された姉のその後の生涯は、まさ  
に貧苦に満ちたものでした。

姉から私の妻に送られて来た手紙には「人様から『何か書き残されたら?』と言われるのですが、それは人様には解らない筆舌に盡せないものがありました。今更思いう出して書いても、自分がみじめになるばかりですから」と『戦争未亡人』としての心情を綴っているのです。

義兄の戦争と戦死、そして姉の生涯を思うにつけても、『戦争の惨酷さと非情さ』に思いを致さずにはおれませぬ。

私はと言えば、昭和十九年六月、母の反対を押し切つて『血書』の志願をして、海軍甲種飛行予科練習生として入隊し、日夜、猛訓練に明け暮れていました。

そこへ昭和二十年四月一日、米軍が沖繩に上陸し、日・米が雌雄を決する沖繩戦が始まったのです。

私は四月五日、大分県『宇佐海軍航空隊』の戦備作業に派遣され、『柳ヶ浦小学校』の講堂に宿営していました。四月二十一日の早朝、B 29爆撃機が来襲し防空壕に避難、そこへ爆弾の投下です。

「シユル・シユル・ヒュー・ヒュー」と空気を切る無気味な音が聞えた一瞬、耳を突き地底を揺がす爆裂弾が襲いました。

崩れかけた壕から這い出して見ると、隣の壕は直撃弾を受けていました。そこには、今しがたまで闘志に溢れていた同期生十五名の、見るに忍びない無残な姿がありました。

『見張台』に立っていた分隊士の右腕は、爆弾の破片でちぎれていました。

市道と麦畑の境目には、腰の背部に大きい穴があき、鮮血を一杯に溜めて、息絶え絶えの兵士を見ました。

航空隊周辺の民家には火がついて、燃え盛っていました。

まさに『地獄図』の惨場がありました。

空爆が収まった後、私達は戦友の屍を戸板に乗せて『駅館川』の河原まで運び、松の丸太を組んで茶毘にふしたのです。

こんな修羅場をくぐり抜け我に還ったとき、『九死に一生』を得たことを実感しました。

長かった戦争が終り、それまで経験したことのない『自由』と『基本的人権』と『平和憲法』を持つことができようになつてから二十数年が経った頃、私の心を突き

動かすものがありました。

それは、「亡き戦友や、戦没者の鎮魂と戦跡地巡礼の旅をしよう」という使命感みたいなものでした。

妻を伴い、南は沖繩から東は福島県相馬市まで。『沖繩の壕』や、『知覧特攻平和会館』では鎮魂の祈りを捧げながら、慟哭の涙を禁じ得ませんでした。

私は、私の戦争体験から得た結論として、つぎのように宣言します。

『戦争は人殺し。戦争は国土の破壊以外の何物でもない』ということ。

私はいま八十七歳。命のある限り、戦争の悲惨さを語り続けていきます。『命の尊さ、平和の大切さ』を訴え続けていくことを誓います。

## 優秀賞

## 戦争のつめあと

島根県

三宅玲子

永井隆著「この子を残して」をはじめて読んだ若き日の感動は今尚忘れる事は出来ない。長崎の原爆で白血病に苦しみ乍ら、母を失った幼い我が子に、自分の亡き後、この兄妹は孤児になるかも知れないと、その行く末を案じての遺書でもある。その心情を思い胸がつまり涙なくしては読めなかった。

一九三一年 満州事変の年に生れた私は、その後日中戦争から大東亜戦争へと拡大して行った中。いつも戦争の中で育って来た。「欲しがりません勝つまでは」という標語の下に軍国少女として健気に生きて来たと思う。

昭和十九年後半になると戦局も激しくなり、本土空襲

がはじまった。東京大阪などの大都会から逃れて山陰へ避難して来る人も増え、当時私の居た松江高女へも疎開転入して来る人が相次いだ。

「昭和二十年三月十日」東京大空襲で焼け出されたNさんは松江の祖母を頼って来ていた。「東京が焼け野原になってしまつてー。」と絶句。

恐怖にふるえ乍ら話してくれたのを覚えている。又広島からも原爆で大火傷を負ったAさん、顔面から首にかけてのケロイドが残った姿で転入して来られた。私達クラスメートはその姿にショックを受け、優しい言葉も慰めの言葉もかけてあげられなかった事、今本当に申し訳なかつたと思つている。

私はその後大田高女へ転校したが、そこでも友達から衝撃的な話を聞かされた。

昭和二十年八月六日の広島原爆で負傷された方や兵隊さん達が広島からはるる、大田迄送られて来たようだ。旧制の大田中学校、大田女学校の講堂は俄か陸軍病院の分院となった。

ひどい火傷につける薬もなくただ傷口に沸く「ウジ」をピンセットで取りのぞいて赤チンをつけるだけ「水！

水！」とあえぐ患者に水をふくませたりと婦人会の人達や女学生が必死の看病をしたが、その甲斐もなく次々と亡くなられたとか、正に学校は修羅場と化したとの事。直接戦禍を受けなかった山陰でも戦時下の状況は深刻であつたと思う。

それから間もなく終戦となり外地からの引揚げが始まり、中国満州朝鮮台湾等から続々と帰国して来られた。敗戦により全財産を失い着のみ着のまま命からくづふるさに辿り着いた人達であつた。

国は「引揚者更生資金」を貸し出し引揚者の自立を助けた。大田でもこの資金を借りて葛の生産をはじめた会社があり、私は女学校を出るとすぐ事務員として働き始めたが工場の手伝いもしたり一生懸命であつた。

スタッフは皆引揚者ばかり。かつては大志を抱いて海外雄飛をした方達も、職を失い失意のどん底からの生活は苦しいものだった。

その中に六才を頭に四人の子供をかかえて引揚げて来られたY氏の話は本当に胸つまるものがあった。ソ連の侵攻により追われる様に遠い日本を目ざしての逃避行は、炎天下も雨の日も無蓋車に乗せられ、ひたすら西へ

南へと、又暗闇の中、大陸の荒野を歩き通しての南下、道中仮りの宿で子供が泣くと「泣かすな！殺せ！」と怒号が飛び思わず子供の口を塞いだとか、同胞なのに敵に見付かったら全員壊滅という極限の状況では人間も地に墮ちるものだろうか。中には思い余って親切な中国人の家庭に子供を預けた方もあつたとか。

その後中国残留孤児問題が起きた時、改めて戦後は終つてないと深く心を痛めた。

又私の義従姉は軍人の妻として渡満したが間もなく終戦になり、ソ連へ抑留された主人と生き別れ、乳幼児二人を伴って引揚げの集団に加わったが、足手まといの子供をつれてはとうとう集団からはぐれてさまよう内二人の子供は餓死してしまった。同行の方達が道端に穴を掘り埋めて下さったとか、身心共にボロ／＼になった若い母親は佐世保に入港するなり力盡きて息絶えたと、彼女の遺品の中に鉛筆をなめ／＼書いたであろう筆跡をたどり、伯母は号泣した。

まことに／＼悲惨で残酷な話である。

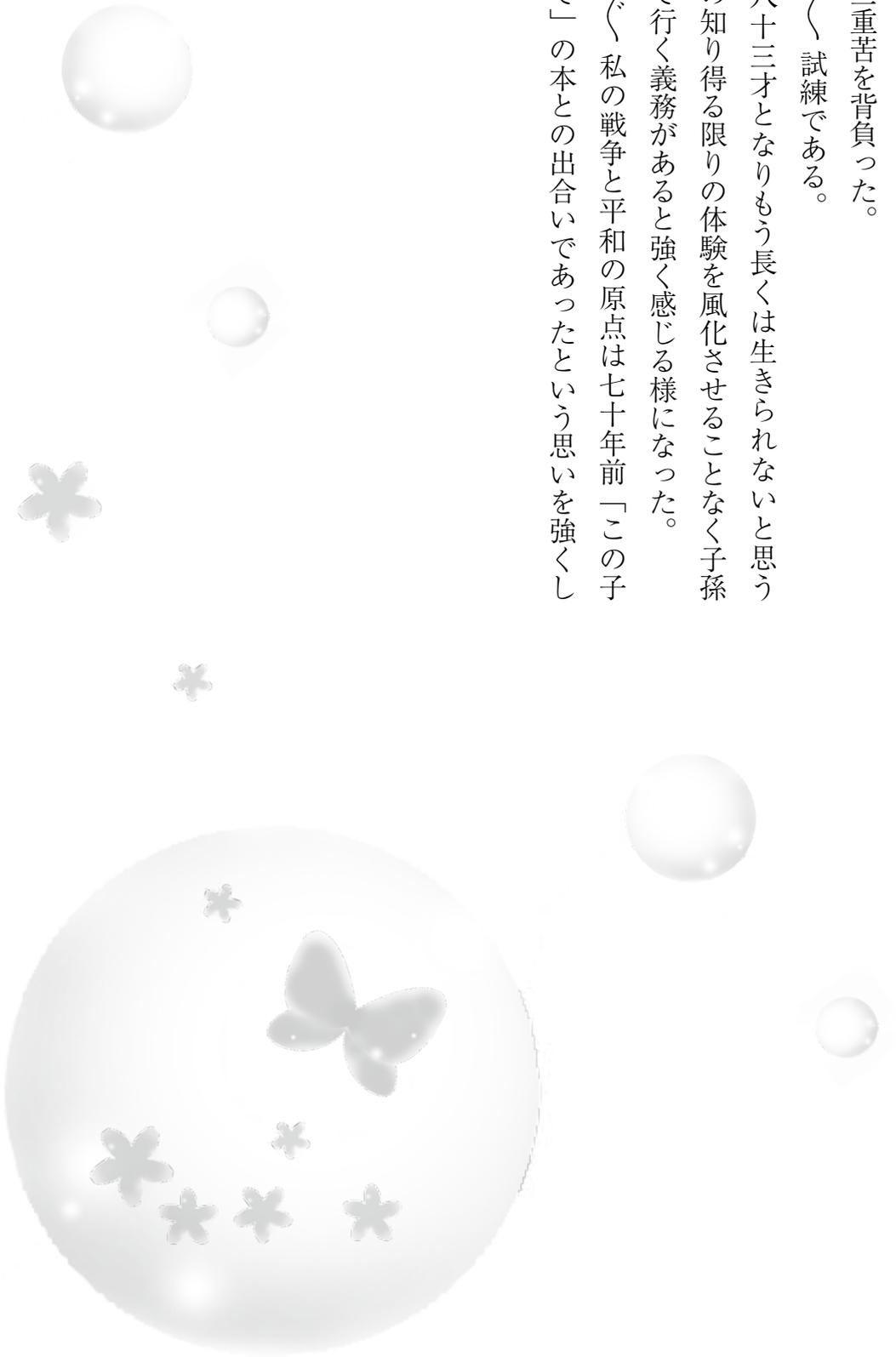
かつての戦争で失つたものは大きい。人を不幸にし正に悲劇であつた。

此の度三年前の東日本大震災大津波、原発事故で日本は再び三重苦を背負った。

重く、試練である。

私も八十三才となりもう長くは生きられないと思う時、私の知り得る限りの体験を風化させることなく子孫に伝えて行く義務があると強く感じる様になった。

つくづく私の戦争と平和の原点は七十年前「この子を残して」の本との出会いであったという思いを強くしている。



## 佳作

大事なことは忘れなごうかいじや

山口県

山やま下した理り恵え

自民・公明両党は七月一日、憲法解釈を変更して集団的自衛権行使を容認する閣議決定案について正式に合意した。自衛隊の海外での武力行使に道を開くもので、「専守防衛」を堅持してきた戦後日本の安全保障政策は歴史的転換点を迎えた。憲法九条という非戦の誓いが否定されてしまった理由は、近年戦争の恐ろしさ・残酷さの記憶が風化してしまったためではないかと私は考える。

私は長崎県で生まれ育った。長崎の公立学校では毎年原爆投下日の八月九日を中心に平和学習が行われている。長崎の子供たちは、平和の尊さと戦争の愚かさについて学ぶ。学生時代、私は日本全国に毎年八月に平和登

校日があり、全国の子どもたちは同じように平和教育を受けていると思っていた。だが、実際はそうではない。いつ原爆が投下されたか知らない子どももいるし、なかには終戦記念日さえ知らない子どももいる。その現実を初めて知ったとき、私は驚いた。そして、彼らの中には戦争を美化し理想化する人さえいる。とても信じられないことだった。

私はある日、知り合いとニート・フリーターのことにについて討論していた。そのとき彼は言った。「彼らは戦争に送って、日本のために役に立てればよい。」私は驚いた。彼の顔は本気だったからだ。「税金も払わない、働かない。飯を食べて排泄だけして寝て何もしない。あいつらは家畜だ。」私はニートやフリーターが戦場に送られたからといってこの問題が解決するというものほとても安易すぎると考える。なぜならば、戦争には実際に何の価値もなく、現実には誰にとっても多大な損害を被ることではかないからだ。現実はただの無意味な人との殺し合いだ。そして、戦争が後世に残した負の遺産は大きすぎる。

二〇一三年、私は中国留学中に南京を訪れた。まず驚

いたことは南京の記念館の説明書きには三か国の国の言葉が記してある。一つ目は中国語、二つ目は英語、三つ目は日本語であった。私はこれが日本人にもこの記念館を訪れるべきであるということの意味するのだろうかと考えている。

私は記念館の中を見学した。当時の生々しい記録に息をのんだ。敷地内の石碑に犠牲になった人々の名前が刻まれていた。館内に彼らの骨が展示されていた。それらは、おびただしい数の犠牲者一人ひとりの生活、家族や夢、未来を奪われたことを私に訴えているように感じられた。

私は大切な家族や友達を失うのが嫌だ。一人でも欠けたら嫌なのに、一瞬にして多くの人を失うのは本当に嫌だ。しかし、このようなことは、約七〇年前、母国や母国外でも起きていた。その当時の人々の気持ちは本当に絶望的だったと思う。

戦力として駆り出されていた日本兵たちも証言で述べていた。「あれは人間がすることではない。悪いことをした。みんなわかっていた。あの戦争が過ちだったということを。」

館内を見終え、私は日本に生まれた人間として一体どうしたらいいかわからなくなった。謝っても許されない事実。私の母国はなんとという過ちを犯してしまったのだろうか。そんなとき私は記念館の出口で私たちへのメッセージを発見した。“許してはいい、だけど忘れるな。”

しかしながら、約七〇年の歳月を経た今、戦争は美化され理想化されようとしている。絶対に忘れてはならない。戦争は愚かだ。平和が一番だ。

実は私も子どものころは平和教育の時間が好きではなかった。なぜならば怖かったからだ。人々は人間じゃないような容姿になり、苦しみ悶えた体験談や描写は幼い心に衝撃を与えた。それゆえ、平和学習を受けることも怖かったし、平和記念館にも行きたくなかった。しかし、このことは実際に起きていたことであり現実であった。当時の私と同じくらい小さな子どもたちはどんなに怖かっただろうか。私は目をつむり、耳をふさげばこの怖い思いから逃げられた。しかし、当時の子どもたちはこの現実から逃げることはできなかったのだ。私は自分の子どもの世代には絶対このような体験をさせたくない。今の日本の若者は平和ボケしているから、外国のように

徴兵制を取り入れるべきという意見もあるが、私はこの意見こそ平和ボケだと思う。戦争がどんなに愚かであり、何もかも奪い尽くすただの愚業だということを知らず、美化する方が平和ボケではないかと考える。

私たちは過去を絶対忘れてはならない。そして忘れてないためにも、私は敗戦国日本、そして被爆地長崎で生まれたことをありのままに受けとめ、戦争という極限状況を生き抜いてきた先人に思いをはせ、二度と戦争を起こしてはならない決意を後世に伝えていきたいと思う。

第二十四回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに受賞結果

【小学生低学年の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
藤原秀伍	名前のプレゼント	島根県	雲南市立飯石小学校三年	最優秀賞
松谷遙月	だいすき	島根県	雲南市立飯石小学校一年	優秀賞
木次緑人	ぼくのへいわ	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	佳作
渡部哲也	へいわを	島根県	雲南市立飯石小学校二年	佳作
小野原志朗	「あい」をしたよ	島根県	雲南市立飯石小学校一年	
堀江奏汰	ぼくとおじいちゃん	島根県	雲南市立掛合小学校二年	
山田夏帆	おじぎ草	東京都	豊島区仰高小学校三年	
田中野乃実	みんなが幸せでいられるように	島根県	雲南市立三刀屋小学校三年	
【小学生高学年の部】				
田中太士	やさしさと笑顔の力	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	最優秀賞
石飛花菜	ひいおばあちゃんをうけついで	島根県	雲南市立掛合小学校四年	優秀賞
吉田千之輔	平和を作るには	島根県	雲南市立吉田小学校六年	佳作
上代雄暉	言葉の兵器	島根県	雲南市立西小学校六年	佳作
水田孝志	世界に向けてラブアンドピース	長崎県	松浦市立調川小学校五年	
植田伊織	永井博士のような勇敢な人になりたい	島根県	雲南市立掛合小学校五年	
藤原隆星	博士から学んだ「強い心」	島根県	雲南市立掛合小学校五年	
吉長紫乃	少しのことでも	島根県	雲南市立吉田小学校六年	
佐々田龍一	人进行うこと	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	
片寄直人	人へのやさしさ	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	

【中学生の部】

氏名	テーマ	都道府県名	学校名	賞名
池田風雅	● 平和のとりで	● 広島県	● 盈進中学校二年	● 最優秀賞
武田神楽	● 残された蝶	● 島根県	● 大田市立第三中学校三年	● 優秀賞
堀江菜々	● 改めて気付いたこと	● 島根県	● 雲南市立吉田中学校二年	● 佳作
福田芽衣	● 如己愛人で世界を変える	● 長崎県	● 長崎市立野母崎中学校二年	● 佳作
アストレイコ龍仁	● 心の中から平和に	● 兵庫県	● 芦屋市立潮見中学校一年	
秋田美月	● 戦争と平和	● 長崎県	● 長崎市立三重中学校一年	
舟橋遼奈	● 平和を築く―ちひろの世界から―	● 東京都	● 東京純心女子中学校二年	
藤原大己	● 私たちの使命	● 島根県	● 雲南市立掛合中学校二年	
真栄田歌南	● 「言葉」で繋ぐ思い	● 沖縄県	● 豊見城市立伊良波中学校二年	
西銘あまね	● 平和な世界	● 沖縄県	● 豊見城市立伊良波中学校二年	
西村綾香	● 戦争と平和人の心	● 島根県	● 雲南市立木次中学校三年	

【高校生の部】

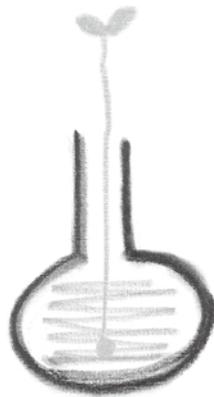
高嶺真帆	● 曾祖母の涙	● 沖縄県	● 未来高等学校二年	● 最優秀賞
寺迫晃良	● 語り部	● 東京都	● 日本大学櫻丘高等学校一年	● 優秀賞
伊藤正子	● 平和はすばらしい	● 愛知県	● 滝学園滝高校一年	● 佳作
伊藤可子	● 歴史に色をつけよう	● 愛知県	● 南山学園南山高校二年	● 佳作
向井晴香	● 被爆地から伝えたいこと	● 長崎県	● 長崎県立長崎東高等学校一年	● 佳作
上田航平	● 如己愛人	● 島根県	● 島根県立三刀屋高等学校二年	
佐藤華	● 気持ち	● 島根県	● 島根県立三刀屋高等学校二年	
森脇咲子	● 衝突	● 島根県	● 島根県立三刀屋高等学校二年	

## 【一般の部】

氏名	テーマ	都道府県名	賞名
年永 永熙一	語り継ぎたい戦争の悲劇 平和への願いをこめて	広島県	最優秀賞
三宅 玲子	戦争のつめあと	島根県	優秀賞
山下 理恵	大事なことは忘れないということ	山口県	佳作
浜野 伸二郎	私からの平和のメッセージ	兵庫県	
川井 康之	父親にみる優しさ	広島県	
池田 孝子	母と私、そして子へ孫へ	島根県	
逸見 修	「おもい」を伝える	新潟県	
佐野 透	父の残した二枚の絵	山梨県	
安原 裕子	被爆伝承者になるために	広島県	
二井 彬緒	遠い国のひとへ	東京都	



NO



YES

KU  
2007. 8. 26